

ウィリアム・バードの楽譜出版におけるシドニー追悼

前原 澄子*

The Elegies on Sidney in William Byrd's Publication of Music

Sumiko MAEHARA

ABSTRACT

Elegies on Sir Philip Sidney are divided into two groups: the elegies printed immediately after Sidney's death in 1586 and those printed in the 1590s. While the former exclusively focuses on Sidney's heroic virtue, the latter praises Sidney as a poet/shepherd within the Arcadian fictional setting. It draws interest towards how Sidney was represented in literary and non-literary works between 1588 and 1590, the period between the two different legends. In this paper, William Byrd's *Psalmes, Sonets and Songs* (1588) and Thomas Watson's *Italian Madrigals Englished* (1590) are examined to prove that the myth representing Sidney as a poet was already prepared by Byrd and Watson even before the publication of Sidney's *Astrophil and Stella* in 1591.

KEY WORDS: Byrd, Watson, Sidney, Astrophil, Psalmes, Sonets and Songs, Italian Madrigals Englished

1. シドニー追悼の変遷

Sir Philip Sidney がネザランドへ出征し、カトリック国スペインとの戦いで命を落としたのは 1586 年のことである。この年から翌年にかけて、ケンブリッジ、オックスフォード、ライデン大学からそれぞれラテン語の追悼詩集が出版されるとともに、英語でも数々の詩文が亡きシドニーへ捧げられる (Brennan 114-18)。ところがこれらの挽歌においてシドニーの詩才は言及されず、もっぱら英雄の美徳が賞賛されることから、これらは戦死したシドニーをプロテスタント国家の殉教者へ神格化するプロバガンダであった可能性が指摘されてきた (Baker-Smith 83-103; Flory 75-95)。一方、1595 年に *Colin Clovts Come Home Againe* とセットで出版された追悼詩集 *Astrophel* では、シドニー (羊飼いの詩人) の死は牧歌の世界に虚構化される。このようにシドニーの追悼が、死後まもない英雄伝説と 1590 年代の詩人伝説に分かれる理由について、今日まで様々な議論が重ねられてきた (Buxton 46-56; Kay 29-66; Hannay 59-83; Falco 52-105; Alexander 56-75)。

Raphael Falco は、シドニーを追悼する詩が一種のジャンルのように発展していく中で、シドニーを詩人

の祖と見なす意識が詩人たちの間で次第に形成されたものと考えられる。具体的には、1591 年に出版された詩華集 *Brittons Bowre of Delights* の巻頭を飾る *Amoris Lachrimae* を出発点に、*The Phoenix Nest* (1593) に収められた 3 篇の挽歌を中継点とし、ついにはスペンサーの *Astrophel* の牧歌追悼詩に見られる詩人崇拜に至ったと仮定するのである (52-105)。たしかに *Amoris Lachrimae* は、シドニーの表象に「愛」を加えた点で、英雄伝説からの離脱の第一歩と言えるだろう (Rollins 5-16)。また *Astrophel* には、先に出版された *The Phoenix Nest* からの 3 篇の挽歌が併せて収録されていることから、これをシドニー追悼詩のひとつの集大成と見なすことが可能と思われる。

一方、シドニーの詩人伝説の形成をパトロンの政治力に帰する説もある。Margaret Hannay は、亡き兄シドニーに代わって多くの詩人を擁護した Mary Sidney Herbert, Countess of Pembroke がこそ、1590 年代にシドニーの詩人伝説を構築した立役者であったと考える。Hannay によると、*Astrophel* の “Ay me, to whom shall I my case complaine” (Spenser *Colin* G-G3) はメアリー・シドニーの著作であり、この詩集はメアリーの意図したシドニー神話の結集と見なされる。もっとも、この詩がメアリーの著作か否かについては長

*一般科目 (英語)

く議論が続いているが (Spenser *Shorter* 662; Coren 25-41)、少なくとも冒頭を飾るスペンサーの挽歌で、シドニーの妹「クロリンダ」がもっとも身分の高い「羊飼ひ」、すなわち詩人として称賛されることは事実であり、この詩集がメアリーを意識に入れた出版であったと考えることは妥当であろう。実際に、スペンサーは “The Ruines of Time” (1591) をメアリーに献呈し、その献辞でシドニー・サークルの亡き人々へ言及している。Hannay はこうした事柄も含めて、幾つかの追悼詩に見られるメアリーへの称賛を、*Astrophel* へつながる一連の神話構築のプロセスとして捉えている (59-83)。

このように、Falco も Hannay もそれぞれ異なる立場からシドニーの詩人伝説の萌芽を 1591 年の作品に見出しているが、それはまた、*Astrophil and Stella* (1591) の出版と無関係ではあり得ない。1591 年に Thomas Newman が初めて出版した *Astrophil* のクォート版は、甚だ不完全なものであったにもかかわらず、内輪で読まれていたソネット集を一般読者に提供した点で、まさにエポックメイキングであったと言える。これによって、シドニーの詩作が世に知られたのみならず、愛をテーマにした詩歌の出版を恥とみなす規範を揺るがし、ひいては 1590 年代に詩の出版ラッシュを生んだことは Arthur F. Marotti の指摘に詳しい (228-32)。また、*Astrophil* の商業的成功によって、シドニー・サークルの文人の名を連ねた詞華集の出版は書籍商の格好のビジネスとなる (Melnikoff 194-202)。身分の低い詩人は自らの著作を権威づけるためにシドニーの名に言及し (Marotti 232-38; Mentz 151-74)、シドニー・サークルに関わる文人たちも出版物を媒介に様々な宣伝を行ったことが近年の研究で明らかにされている (竹村 19-59)。

こうしてみると、1590 年代になってシドニーが詩人の祖として追悼されるようになった背後には、*Astrophil and Stella* の出版が象徴するように、手稿であった詩が一般読者の目に触れる媒体に転じたことで、詩人、パトロン、書籍商のそれぞれにシドニーの名を語る新たなメリットがもたらされた実態が浮かびあがる。そうすると、死後まもない英雄伝説と 90 年代の詩人伝説の間隙となる 1588 年から 90 年の間には、シドニーはどのように表象されていたのだろうか。不思議なことに、従来の研究ではこの点についてほとんど触れられていない。しかしながら、調査の対象を詩集に限らず楽譜に広げてみると、*Astrophil* の手稿の一部が早くも 1588 年には楽譜となって印刷され、多くの人々の目に触れた事実が注目される。以下では、カ

トリックの音楽家ウィリアム・バードによって出版された *Psalmes, Sonets and Songs* が、いみじくも 90 年代のシドニー詩人伝説の布石となった事実を明らかにしたい。

2. *Psalmes, Sonets and Songs* (1588)

1588 年に書籍商 Thomas East によって出版された William Byrd の *Psalmes, Sonets and Songs* は、詩篇 10 篇、ソネットまたは牧歌 16 篇、悲しみと敬虔なる歌 7 篇と、誉れ高いサー・フィリップ・シドニーを弔う歌 2 篇から構成される 5 声の合唱曲である。巻末の挽歌 2 篇 “Come to me grief for ever” と “O that most rare breast” (Byrd Vol. 12 155-70) の内容は、Alexander も指摘するように (57-60)、シドニーの死後まもない英雄伝説に属するものである。しかしながら、これらの挽歌はあくまでも歌集全体においてどのような意味を持つのかを分析する必要があるだろう。

まず留意すべきは、冒頭の詩篇 10 篇を除くと、この楽譜が詩華集の体裁をなしている点である。そして、すべての詩は手稿の初版であったと考えられる。作者には、Sir Walter Raleigh、Edward Dyer、Edward de Vere, Earl of Oxford などの宮廷詩人が連なる中で、もっとも注目すべきはシドニーの *Astrophil and Stella* の第 6 の歌、“O you that hear this voice” (Byrd Vol. 12 63-67) が第 16 番に位置することである。テキストには、数箇所わたる誤写もしくは作曲の都合による改変が認められ、おそらくシドニー・サークルに関わる誰かからバードに手稿が渡されたものと考えられる (Duncan-Jones 173; Woudhuysen 249-57)。第 6 の歌は、ステラの美声と美貌のいずれが勝るかをテーマにしており、ステラの美が「完全なる和声」に喩えられる点で、まさに合唱曲として奏でられるのにふさわしい。またこの曲と対をなすのは、ステラ、すなわち Penelope Lady Rich を暗示する 23 番の “Constant Penelope, sends to thee careless Vlisses” (Byrd Vol. 12 99-103) である。Ovid の *Heroides* の冒頭を英訳したこの詩が実在のリッチ夫人を連想させることは、翌年にバードが出版したもうひとつの詞華曲集 *Songs of Sundrie Natures* (1589) で同じ工夫がより明確に意図されることに裏づけられる (Smith “Music” 530-31)。全部で 47 曲からなる *Songs* では、第 33 番に *Astrophil* の第 10 の歌から冒頭 3 つのスタンザが編まれ (Byrd Vol. 13 208-11)、27 番の “Penelope That Longed” (Byrd Vol. 13 168-77) と対をなす。また、この曲を導く 26 番の結句、“This Lady Rich is of the gifts of beauty / But unto her are gifts of fortune dainty.” (Byrd vol. 13

165-67)では、リッチ夫人の美貌が高らかに歌われており、両曲集の *Heroides* からの引用がペネロープ・リッチを暗示することは明らかと言えるだろう。またこの歌集には、シドニーゆかりのジャンルである牧歌の心情を歌ったものが多い。こうしてみると巻末の挽歌は、サッフォーを模した詩形と無韻詩の試みがそれぞれ新しく、まさにシドニー・サークルの詩人たちを彷彿とさせるものである。

音楽学者は、*Psalms, Sonets and Songs* が、バードの生涯において特殊な作品であることを一様に指摘する。バードは、生涯カトリックの信仰を貫き、宗教曲を書くことに生涯を捧げたことで知られている。プロテスタントの英雄シドニーの追悼や、宮廷人の恋歌を編んだ詞華集を、なぜバードが作曲して出版する必要があったのかが繰り返し議論されてきた。音楽学者の知見によると、*Psalms* の楽曲の構成は、イタリアのマドリガルを装いながらもカトリック典礼音楽の形式を各所に残し、このような世俗曲集を書くことがバードの本意ではなかったことを窺せるという (Smith “William” 8-9)。そもそもバードが出版した楽譜は主にラテン語の宗教曲であることを考えると、1588年と89年に続けて出版された英語の世俗曲集の特異性はますます浮き彫りにされる (能登原「楽譜受容」27-42; 「声楽曲集」144-56)。音楽学者からは、カトリックの音楽家を数多く庇護したリッチ夫人へのオマージュとしてこれら2つの楽譜が出版された可能性や (Smith “Music” 529-35)、*Psalms* にはカトリック教徒 Edmund Campion の殉教を追悼する詩の冒頭部、“Why do I vse my paper incke & pen” (Byrd Vol. 12 xxxvii-xxxix) が含まれていることから、この曲集がシドニーの葬儀の直前に処刑されたメアリー女王の追悼をも意図した可能性が指摘されてきた (Smith “William” 1-29)。しかしながら、カトリック教徒でありながら、1575年には王室礼拝堂の音楽家という名誉ある地位に就き、エリザベス女王から楽譜出版の独占権まで与えられていた作曲家が、身の危険を冒して反体制的メッセージを曲に込めたとは考え難い。ここで、バードがこの曲集を出版する意義をどのように述べているかを献辞や序文に探ってみる必要があるだろう。

楽譜の表紙には、この5声の合唱曲集が「海外に散逸していた楽譜を集めて修正したものや、なかなか手に入らない詩歌を新たに作曲したもの」 (Byrd Vol. 12 xli) であることが述べられている。そして最も注目すべきは、Sir Christopher Hatton へ宛てた献辞の前に、「合唱を学ぶことの8つのメリット」を作曲者自らが

箇条書きにしていることである。すなわち、歌うことは健康によく、弁舌や発音の上達にもつながり、よりよい声で合唱をすることは神への奉仕に通ずることが述べられている (Byrd Vol. 12 xliii)。献辞では、初めて英語の合唱曲集を出版するに当たって庇護を乞う形式的な言葉が並べられ (Byrd Vol. 12 xliv)、最後には読者に向けて、音楽を好きになればなるほど合唱の技術が向上することが述べられている (Byrd Vol. 12 xlii)。

こうした言葉からは、作曲者が想定した読者が、宮廷人や音楽家ではなく、これから合唱に親しもうとする素人であることがわかる。さらにバードはこの曲集の成り立ちを、「器楽合奏に合わせて一人で歌う曲を5声の合唱曲に編曲した」と述べており、楽器がない家庭でも気軽に演奏を楽しめるようにバードが工夫したことが窺える。言いかえれば、楽譜の手稿を入手することのできない中産階級に向けてバードは楽譜を出版し、音楽愛好家を増やすことを意図したと考えられるのである。はたして *Psalms* の売れ行きは好調で、音楽愛好家が順調に増えたことを、バードは翌年に出版した *Songs of Sundrie Natures* の献辞で Sir Henry Caryl に次のように語っている。

Having obserued (Right Honorable) that since the publishing in print, of my last labors in Musicke, diuers persons of great honor and worship, haue more esteemed & delighted in the exercise of that Art, then before. And being perswaded, that the same hath the rather encreased, through their good acceptation of my former endeours: it hath especially moued and encouraged me to take further paines to gratifie theyr curteous dispositions therevnto, knowing that the varietie and choyse of songs, is both a prayse of the Art, and a pleasure to the delighted therein (Byrd Vol. 13 viii).

また、読者へはもっと平易な表現で、「合唱を楽しむ人が瞬間に増えた」ことに感謝の意を表してもう一度このような曲集を作ったことが述べられている (Byrd Vol. 13 ix)。

このように、シドニーにちなんだ詩歌の手稿をバードが出版した動機は、合唱音楽の普及であったことが明らかである。しかしながらその究極の目的は、音楽愛好家を増やすことによって、宗教改革で排斥の危機

に曝されていた教会音楽を擁護することであったことは述べるまでもない。音楽をめぐる当時の厳しい状況は、オックスフォードの哲学者 John Case の *The Praise of Musicke* (1586) によって裏づけられる。数々の著作をラテン語で書き残した Case は、唯一この書を英語で匿名出版し、脚注には一般読者に親しみやすい人物名を挙げて、できるだけ多くの読者に音楽の存在意義を訴えている (Barnett 252-66; Case Introduction)。また、バードは Case のこうした努力を称え、“A Gratification vnto Master Iohn Case, for His Learned Booke, Lately Made in *The Praise of Musicke*” (Byrd *Gratification*) を作曲し、1589 年に出版している。ここにもバードの音楽を擁護する強い姿勢を見出すことができるだろう。

こうした事情を踏まえると、シドニー・サークルから流出した手稿は、音楽を擁護する媒体となってその存在価値を発揮したことになるが、一方それらが、詩歌の擁護とも表裏一体をなすものであったことは述べるまでもない。宮廷人の手稿が楽譜となって出版され、歌として人々に口ずさまれることによってその生命を永らえたことは、*Psalmes* に編まれた多くの詩が 1600 年には *England's Helicon* に再版された事実にも窺える。楽譜出版の独占権を持つバードに託された手稿は、「音のついた詩華集」として印刷されて商業的に成功した。この事実は、90 年代の詩の出版文化への重要な架け橋になったものと思われる。*Psalmes, Sonets and Songs* は、音楽家と文人の利害の一致によって世に送り出された、シドニーの詩人伝説の最初の布石であったと考えられるのである。

3. *Italian Madrigals Englished* (1590)

バードは、カトリックの文人 Thomas Watson が編集した合唱曲 *Italian Madrigals Englished* に自作の 2 曲を寄せて 1590 年に出版を認可しているが、この曲集にはシドニーの詩人伝説の布石をより明確に見出すことができる。楽譜の表紙には、この曲集がイタリア・マドリガルを初めて英訳したものであり、バードの傑作 2 曲も含まれていることが宣伝文句として記されている。バードの創作はエリザベス女王を称える歌であり、この曲集全体が女王への忠誠を示すことを裏づけている。また、イタリア語から翻訳された 26 曲のうち、23 曲までが Luca Marenzio の作であり、残りは Girolamo Conversi, Giovanni Maria Nanino, Alessandro Striggio の作品から 1 曲ずつが収録されている。

この曲集をワトソンが手がけた表向きの理由は、イ

タリアの本格的なマドリガルを英国に導入することであったと思われる。しかしながら、Marenzio の曲には到底イタリア語の翻訳とは思えない歌詞が発見される。シドニーとその岳父 Sir Francis Walsingham の追悼である。この点について、音楽学者からは夙に疑問が投げかけられてき (Kerman 129-130; Ruff 12)。まず第 1 番では、Astrophil と Stella の名が語られる。ペルソナは「私」であり、アストロフィルへの愛が歌われることから、おそらくシドニーを偲ぶために、原詩の人物名が変更されたものと考えられる。

When first my heedless eyes beheld with pleasure
Both of nature & beauty all the treasure
In Astrophill, whose worth exceeds al measure
My fawning hart with hot desire supryzed
Wyld me intreat, I might not be dispyzed:
But gentle Astrophil with looks vnfained,
Before I spake, my praier intertaind
And smiling said, viles Stella dissembleth
Her looke so passionat my loue resembleth. (Watson *Italian* 1-4)

また 19 番にはシドニーの実名が登場するが、もはやその死は嘆かれない。シドニーの昇天は歌によって祝福される。

Sweet Sydhey liues in heaui
[O] therefore let our weeping
Be turnd to hymns & songs of plesant greeting. (Watson *Italian* 68-69)

そして 23 番では、亡きウォルシンガムが、Virgil の牧歌の登場人物 Meliboeus に喩えられ、Astrophill のもとへ昇天することが祝福される。さらに Marenzio の終曲 27 番では、Meliboeus と Astrophill が天国でともに楽しく暮らすことが明るいつとんで歌われる。

1590 年に没したウォルシンガムは、レスター、シドニーとともにプロテスタントの急進派勢力の中核であり、ワトソンはその諜報活動に雇われた経緯がある。またこの曲集が献呈されたのは、亡きシドニーの後継者たらんと、シドニーの未亡人 Frances と同年に結婚した Robert Devereux, 2nd Earl of Essex であることから、Marenzio の陽気なマドリガル集は、プロテスタント急進派の新たなリーダーであるエセックス伯とフランススの祝婚歌として捧げられたとも考えられる (Duncan-Jones 178-80)。ワトソンは、そうしたエセックス伯の思いを代弁するかのように、ラテン語の献辞において、エセックスの功績を軍神 Mars のそれに喩え

て称賛するとともに、太陽神 Phoebus、すなわちシドニーのようになるためには、軍人であるだけでなく、詩歌に通じた文人でもあるべきことを仄めかしている。

[...] But to translate the melodies of the Italian nightingale is a trivial and feeble task compared with the work of Mars. Value, I beg you, these heartfelt offerings whether they strike a peaceful or a lofty note. Phoebus penetrates both the clear and the obscure with his special radiance. If you will willingly accept the clear with the obscure you will be a Phoebus too. Phoebus you will be, unless Mars sweep you from your hallowed pinnacle to wage ferocious war with the might of your arms. (Watson *Italian* xxxv-xxxvi)

ワトソンは 1580 年代にはカトリックの貴族に自作を次々に献呈した事実を踏まえると、プロテスタントの急進派におもねるようなこの曲集は、カトリックでありながら急進派の諜報活動にも従事したワトソンの二面的な立場を如実に物語っている (Hamilton 34-36)。バードの *Psalmes* も同じくプロテスタント急進派の Christopher Hatton へ献呈され、エセックス伯の妹リッチ夫人へのオマージュを含み、さらには Edmund Campion の殉教とシドニーの戦死を併せて追悼する構成になっていることを考えると、両曲集はカトリック信仰と君主への忠誠の相反する二面性を映し出して示唆深い。1580 年代の中頃までワトソンやバードを庇護したのは、芸術に深い理解を示したカトリックの忠臣 オックスフォード伯であったことは夙に知られている。オックスフォード伯が二度にわたって投獄の憂き目にあった後、ワトソンが *Hekatompathia or Passionate Century of Love* を伯に献呈し、女王に対する伯の忠誠を代弁したことは近年の研究に詳しい (Hamrick 151-88)。また、バードの”The Earl of Oxford March” (Mosher 43-52) や、オックスフォード伯がバードの兄に屋敷を売ってバードを苦境から救ったことなども、バードとオックスフォード伯の親密な関係を物語っているとと言えるだろう。しかしながら、1580 年代後半にはオックスフォード伯の経済はすでに困窮を極め、文人や音楽家の庇護は困難であったと思われる。バードとワトソンの手がけたシドニー追悼の譜は、プロテスタント急進派の新しいパトロンへ向けて発信された忠誠のメッセージであったと考えられるだろう。シドニーの詩人伝説の背後には、90 年代における詩人の系譜

作り、パトロンの政治活動、書籍商のビジネスがあったのみならず、カトリック信仰と国家への忠誠の狭間で芸術の発展に寄与したバードやワトソンの存在があったことは看過されるべきではない。

(引用文献)

- Alexander, Gavin. *Writing after Sidney: The Literary Response to Sir Philip Sidney 1586-1640*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Baker-Smith, Dominic. “‘Great Expectation’: Sidney’s Death and the Poets.” In *Sir Philip Sidney: 1586 and the Creation of a Legend*. Eds. Jan van Dorsten, Dominic Baker-Smith and Arthur F. Kinney. Leiden: Leiden UP, 1986. 83-103.
- Barnett, Howard B. “John Case—An Elizabethan Music Scholar.” *Music & Letters* 50 (1969): 252-66.
- Brennan, Michael G. and Noel J. Kinnamon. *A Sidney Chronology 1554-1654*. Basingstoke: Palgrave MacMillan, 2003.
- Buxton, John. “The Mourning for Sidney.” *Renaissance Studies* 3 (1989): 46-56.
- Byrd, William. *The Byrd Edition*. Vol. 12. *Psalmes, Sonets and Songs (1588)*. Ed. Jeremy Smith. London: Stainer & Bell, 2004.
- . *The Byrd Edition*. Vol. 13. *Songs of Sundrie Natures (1589)*. Ed. Edmund H. Fellowes. Revised by Philip Brett. London: Stainer & Bell, 1962.
- . *A Gratification vnto Master John Case, for His Learned Booke, Lately Made in the Praise of Musicke*. London: Thomas East, 1589. STC (2nd ed.) 4246.
- Case, John. *The Praise of Musicke (1586)*. Ed. Dana F. Sutton. Irvine: The U of California, 2009.
- Coren, Pamela. “Edmund Spenser, Mary Sidney, and the *Doleful Lay*.” *Studies in English Literature, 1500-1900*, 42 (2002): 25-41.
- Duncan-Jones. “‘Melancholie times’: Musical Recollections of Sidney by William Byrd and Thomas Watson.” *The Well Enchanting Skill: Music, Poetry, and Drama in The Culture of the Renaissance*. Eds. John Caldwell, Edward Olleson and Susan Wollenberg. Oxford: Clarendon P, 1990.
- Falco, Raphael. *Conceived Presences: Literary Genealogy in Renaissance England*. Amherst: U of Massachusetts P, 1994.
- Flory, Sean. *How to Remember Thee?: Problems of*

- Memorialization in English Writing, 1558-1625*.
Ph.D. Dissertation (2008) The Graduate Faculty of
the Louisiana State University and Agricultural
and Mechanical College.
- Hamilton Donna B. *Anthony Munday and the Catholics,
1560-1633*. Aldershot: Ashgate, 2005.
- Hamrick, Stephen. *The Catholic Imaginary and the
Cults of Elizabeth, 1558-1582*. Farnham: Ashgate,
2009.
- Hannay, Margaret P. *Phillip's Phoenix: Mary Sidney,
Countess of Pembroke*. Oxford: Oxford UP, 1990.
- Kay, Dennis. *Melodious Tears: The English Funeral
Elegy from Spenser to Milton*. Oxford: Clarendon
P, 1990.
- Kerman, Joseph. "Elizabethan Anthologies of Italian
Madrigals." *Journal of the American Musicological
Society* 4 (1951): 122-138.
- Marotti, Arthur F. *Manuscript, Print, and the
English Renaissance Lyric*. Ithaca: Cornell UP,
1995.
- Mentz, Steven. "Selling Sidney: William Ponsonby,
Thomas Nashe, and the Boundaries of Elizabethan
Print and Manuscript Cultures." *Text* 13 (2000):
151-74.
- Melnikoff, Kirk. "Jones's Pen and Marlowe's Socks:
Richard Jones, Print Culture, and the Beginnings
of English Dramatic Literature." *Studies in
Philology* 102 (2005): 184-209.
- Mosher, Sally. "William Byrd's 'Battle' and the Earl
of Oxford." *The Oxfordian Volume* 1 (1998): 43-52.
- Rollins, Hyder Edward, ed. *Brittons Bowre of
Delights 1591*. New York: Russell & Russell, 1968
rpt. 1933.
- Ruff, Lillian M. "The Madrigal, the Lute Song and
Elizabethan Politics." *Past and Present* 44
(1969): 3-51.
- Smith, Jeremy L. "Music and Late Elizabethan
Politics: The Identities of Oriana and Diana." *Journal of the American Musicological Society* 58
(2005): 507-58.
- . "William Byrd's Fall From Grace and His First
Solo Publication of 1588: A Shostakovian
"Response to Just Criticism?" *Music and Politics*
1 (2007): 1-29.
- Spenser, Edmund. *Colin Clovts Come Home Againe*.
Amsterdam: Da Capo P, 1969.
- . *The Shorter Poems*. Ed. Richard A. McCabe.
London: Penguin Books, 1999.
- Watson, Thomas. *Italian Madrigals Englished* (1590).
Ed. Albert Chatterley. London: Stainer & Bell,
1999.
- . *The Complete Works of Thomas Watson
(1556-1592)*. Vol. 2. Ed. Dana F. Sutton. Lewiston:
The Edwin Mellen P, 1996.
- Woudhuysen, H. R. *Sir Philip Sidney and the
Circulation of Manuscripts 1558-1640*. Oxford:
Clarendon P, 1996.
- 竹村はるみ「書齋の中のシドニー・サークル - スペン
サーの友情伝説を読む -」圓月勝博編『食卓談義の
イギリス文学』所収 (彩流社, 2006) 19-59.
- 能登原由美 「ウィリアム・バード中期の楽譜出版活
動における二面性—楽譜受容に対する意識とカトリ
ック信仰—」『藝術研究』15 (2002): 27-42.
- . 「ウィリアム・バードの楽譜出版 - 声楽曲集『詩
編、ソネット、悲しみと敬虔の歌曲集』と『くさぐ
さの歌』に焦点をあてて -」『音楽学』48 (2003):
144-55.